

中学校体育における生徒の劣等コンプレックスに関する研究

當山 貴弘 (兵庫教育大学大学院)

1. 目的

本研究の目的は、体育授業における劣等コンプレックスの認知が高い生徒の特徴について明らかにすること(研究1)、またその認知が学習行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討すること(研究2)を目的とした。なお、体育授業の好き嫌いを本研究では調整変数に位置づけ、それが生徒の実態を理解することに有用か否かについても明らかにすることとした。

2. 体育適応感と体育授業の好き嫌いからみた劣等コンプレックスの認知(研究1)

調査方法: 中学生 708 名(男子 371 名, 女子 337 名; 年齢 13.92±.89 歳)に体育授業における劣等コンプレックス尺度, 体育適応感尺度, 体育授業の好き嫌いについて調査を実施した。

結果および考察: 体育適応感による 4 類型と好意的感情・嫌悪的感情の 2 群を独立変数に, 劣等コンプレックスの C-運動スキル得点ならびに C-心理社会身体要因得点(C-はコンプレックス)をそれぞれ従属変数とした二元配置分散分析を行った。その結果, どちらの得点にも交互作用が認められたため, 単純主効果の検定を行ったところ, C-運動スキルと C-心理・社会・身体要因の得点が最も高かったのは好意的感情群の脱連帯型であった。

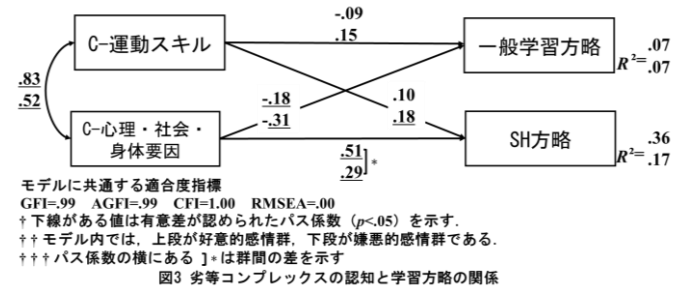
したがって, 体育授業における劣等コンプレックスの認知得点が高い生徒は, 体育に対して好意的感情を抱きながらも, 授業に適応できない傾向があることが明らかとなった。このような特徴を持つ生徒は, 「体育授業は好きだけど学習内容

がつまらない, 仲間とうまくいかない」といった複雑な心情を抱いていることが推測される。

3. 体育授業の好き嫌いを調整変数とした劣等コンプレックスの認知と学習方略の関係(研究2)

調査方法: 中学生 692 名(男子 343 名, 女子 349 名; 年齢 13.94±.83 歳)に体育授業における劣等コンプレックス尺度, 体育における学習方略尺度, 体育授業の好き嫌いについて調査を実施した。

結果および考察: 嫌悪的感情群と好意的感情群による多母集団同時分析を実施した結果, モデルの適合度は基準を満たす値であった。各群のパス係数は, 嫌悪的感情群と好意的感情群ともに C-心理・社会・身体要因から一般学習方略に負の影響(順に $\beta=-.31$, $\beta=-.18$)を示し, SH(セルフハンディキャッピング)方略に正の影響(順に $\beta=.29$, $\beta=.51$)を示した。また C-心理・社会・身体要因から SH 方略に及ぼす影響力は, 嫌悪的感情群よりも好意的感情群が強かった(図1)。SH 方略には, 自尊感情を維持・向上する働きがある。好意的感情を抱く生徒の中には, SH 方略を選択することで好意的な感情を維持しているものも存在している可能性がある。



4. 結論

劣等コンプレックス得点が高い生徒は, 体育が好きと好意的反応を示すが, その一方で授業への適応度が低いという特徴を持っている。また, 体育に好意的な生徒の劣等コンプレックスが高まると, 拒否的・回避的な学習行動を選択する傾向を強めることも明らかとなった。

